



日本学術会議
SCIENCE COUNCIL OF JAPAN

2020年8月29日 オンライン

1

学術フォーラム 学術振興に寄与する 研究評価を目指して 趣旨説明

三成 美保

(日本学術会議副会長・奈良女子大学副学長・教授)



I 研究評価に関する提言(案) 科学者委員会研究評価分科会

- ▶ 学術の振興に寄与する研究評価を
目指して
 - － 定量的評価手法及び資源配分へのその利用の問い直しを
中心に－
- ▶ 要旨(案) の紹介
- ▶ 本学術フォーラムの講演・報告内容を提言
に盛り込む予定→ご意見をいただきたい

1. 本提言の背景と目的

- ▶ 日本では、1990年代から研究評価の制度が本格化してきた。
- ▶ しかし、今日、研究力低下が指摘される中で、**研究評価は学術行政上まったく新たな文脈**に置かれるようになっている。
- ▶ 個人の研究活動の評価を大学・研究機関の評価及び予算配分の決定に反映させるとともに、研究者個人の勤務評定に直結させる方向が顕著になっているのである。
- ▶ **このような状況は、日本の学術の振興にとって決して望ましいとは言えない。**
- ▶ 本提言では、日本学術会議がこれまでに発出した提言・報告をふまえ、**定量的評価手法の見直しを求める国際的動向を参考にしつつ、定量的指標への過度の依存を脱し、研究の本質的多様性を尊重するという見地**から、研究評価に関して堅持すべき原則及び留意事項を六つにまとめた。
- ▶ すべての関係者（関係省庁、資金配分・研究助成機関、評価機関、研究資金提供組織、大学・研究機関）がこれを尊重することを期待する。

2. 提言—学術の振興に寄与する 研究評価を目指して(案) (目次)

- ▶ 1. 本提言の背景と目的 1
 - ▶ (1) 本提言の背景 1
 - ▶ (2) 本提言の目的 1
- ▶ 2. 研究評価をめぐる国際的動向と日本の課題—定量的評価手法の問い直し 2
 - ▶ (1) 研究成果に基づく資源配分の問い直し—定量的評価の限界 2
 - ▶ (2) 定量的評価手法を問い直す4つの国際文書 3
 - ▶ (3) 新しい問題提起—「測りすぎ」への警告と「エンゲージメント」の評価 4
- ▶ 3. 研究評価をめぐる諸外国の動向 5
 - ▶ (1) 中国における「SCI (Science Citation Index) 論文至上主義」の是正 5
 - ▶ (2) イギリスにおける研究評価—RAEからREFへ 6
 - ▶ (3) ドイツ—評価手法の中心はピアレビュー 6
 - ▶ (4) その他の注目すべき新しい取組 7
- ▶ 4. 日本における研究評価の制度化と現状 8
 - ▶ (1) 研究評価の拡大と質的变化 8
 - ▶ (2) 研究評価の現状と問題点 8
 - ▶ (3) 大学評価における研究評価の状況 9
 - ▶ (4) 研究の分野別多様性と研究評価の公正 11
 - ▶ ① 分野別多様性の尊重 11
 - ▶ ② 研究の分野別特性への配慮 11
 - ▶ ③ 研究評価の公正—アンコンシャス・バイアスの排除 13
- ▶ 5. 研究の多様性を尊重する研究評価を目指して 13
 - ▶ (1) 人文・社会科学における研究評価のあり方 13
 - ▶ ① 人文・社会科学における研究評価の特性 13
 - ▶ ② 人文・社会科学研究を公正に評価するシステムの構築 14
 - ▶ (2) 理学系研究における研究評価のあり方 15
 - ▶ (3) 工学系研究における研究評価のあり方 16
 - ▶ (4) 若手研究者を支援する研究評価—定量的評価の見直しとバイアスの排除 17
 - ▶ (5) 研究支援の立場から—他分野に向けた発信の課題 18
- ▶ 6. 提言—学術の振興に寄与する研究評価を目指して 19

提言 1 慎重な配慮と見直し

- ▶ 提言 1 学術振興の視点から、文部科学省及び財務省に対して、研究成果に基づく資源配分には慎重な配慮を求めたい。一律の評価指標の設定が研究力を大きく損なうことに十分留意し、研究活動を支援する研究評価のあり方が検討されるべきである。
- ▶ 研究成果に基づく資源配分については、文部科学省及び財務省に対して慎重な配慮を求めたい。大学への資源配分において一律の定量的指標が設定されるならば、研究の画一化が誘導される恐れが大きく、大学・研究機関ならびに研究者個人の研究力を著しく損なう。さらに、大学や組織の評価指標が勤務評定などの個人の評価指標にも用いられるならば、研究者個人の活動にも大きな影響を及ぼす。とりわけ、若手研究者などが評価指標に合致する研究を選ばざるを得ない状況に追い込まれがちとなり、日本の研究力全体が今以上に低下することが強く懸念される。

提言 2 研究の多様性の尊重

- ▶ 提言 2 文部科学省・財務省などの関係省庁、日本学術振興会や科学技術振興機構などの資金配分・研究助成機関、大学改革支援・学位授与機構などの評価機関、企業・自治体などの研究資金提供組織、大学・研究機関は、研究評価にあたって研究の多様性を最大限尊重すべきである。研究目標も研究手法も多様であり、それに応じて評価基準も異なる。学術の振興のためには、必ずしも個別具体的な応用・用途を直接的目標とはしていない基礎研究の長期的・持続的発展に繋がる研究評価が不可欠である。
- ▶ 多様性こそ学術の活性を保つ道であり、研究評価にあたっては研究の多様性が最大限尊重されるべきである。学術的知識の最前線を進める研究と社会的問題の解決を目指す研究とでは目標も手法も異なり、それに応じて評価基準も異なる。今日、研究とイノベーションが強く結びつけられる中で、研究者各自の内発的関心と長期的視野に基づく基礎研究に取り組む環境が急速に失われ、学術の裾野を形成する研究者の活動が弱体化している点が懸念される。人文・社会科学研究及びあらゆる分野の基礎研究には、必ずしも個別具体的な応用・用途を直接的な目標としない研究が少なくない。これらの基礎的な諸研究の長期的・持続的発展に繋がる研究評価が不可欠である。

提言 3 科学者の説明責任

- ▶ **提言 3 科学者コミュニティは、研究の分野別特性に応じた研究評価のあり方を政府や市民社会に対して提案し、公的資金交付に対する説明責任を果たすべきである。**
- ▶ 科学者コミュニティは、研究活動が税金を資源とする公的資金と市民の理解に支えられていることに十分留意し、政府・評価機関、他分野の研究者及び市民社会に対して研究の特性と意義についてわかりやすく説明すべきである。また、学協会等は日本学術会議分野別委員会等と協力しつつ、望ましい分野別研究評価のあり方と避けるべき研究評価のあり方を示し、文部科学省等は予算配分において、大学・研究機関は部局予算や人事において、これを十分に尊重することが望まれる。

提言 4 基本は定性的評価

▶提言 4 文部科学省及び研究資金配分機関・評価機関は、研究評価の制度設計にあたりピアレビューを中核とする定性的評価を基本にすべきであり、定量的指標に過度に依存してはならない。定量的評価は定性的評価の補助として用いられるべきである。

▶文部科学省及び研究資金配分機関・評価機関は、研究評価のあり方を定めるにあたって、学術分野ごとの特性、今後に求められる学術のあり方、評価導入による学術への影響を十分に考慮すべきである。研究評価の制度設計にあたっては、ピアレビューを定性的評価の中心に据えるとともに、インパクトの評価等では専門家（ピア）以外を含めた定性的評価も検討すべきである。定量的指標はあくまで参考値として位置づけるべきであり、人間による評価を基本とすべきである。

提言 5 多角的評価

- ▶ 提言 5 研究評価にあたっては、多角的な見地からの学術的貢献の評価、将来の可能性を含めた社会・経済・文化的インパクトの評価、既存の評価基準にあてはまらない新しい取組の評価などに留意すべきである。
- ▶ 学術的貢献の多角的評価という見地から、研究成果の公表方法（論文・著作・報告など）の多様性、言語の多様性、研究期間の多様性などに留意すべきである。インパクト評価については、「生産的相互作用」（多様な参加者間での知識交換）や「エンゲージメント」（将来的にインパクトを生むことが想定される活動）の評価、インターネットを活用した成果発信などの新しい取組にも十分配慮すべきである。若手研究者の評価にあたっては、職階・勤務地の変動・流動性に伴って教育貢献や地域貢献に反映された研究活動の評価が履歴上の継続性を持つよう配慮されるべきである。

提言 6 熟慮・メタ評価

- ▶ 提言 6 研究評価の制度設計には熟慮が求められる。研究評価が学術のあり方に多大な影響を与えることに鑑み、評価の透明性と公平性の確保、データの適切な収集・管理・公開、ピアレビューアーの公平な選出、評価設計を担う専門職の育成、評価システムの不断の検証（メタ評価）が不可欠である。そのためにもすべての関係者は相互に連携しつつ、学術の振興に寄与する研究評価のあり方を不断に検証すべきである。
- ▶ 研究評価の制度設計には、研究評価の目的、研究評価の費用対効果、評価指標の設定、評価の検証方法、データ管理などについての熟慮が求められる。資金提供者や被評価者が評価結果を検証できるように、研究評価の透明性と公平性を確保すべきである。また、すべての関係者の協力を得て、大学改革支援・学位授与機構などの評価機関と日本学術会議が連携し、学術の振興に寄与する研究評価のあり方を不断に検証することが望ましい。

II 本日の学術フォーラム

第一部

- ・学術振興に寄与する研究評価とは？

第二部

- ・あるべき研究評価を求めて
ー現状と課題

第三部

- ・パネル・ディスカッション
「学術振興に寄与する研究評価とは」